

溝墓群の時期は従来から庄内式と呼称されてきた土器群の新しい段階を中心に一部布留式 of 古段階に及ぶといった位置づけができよう。東海地方では高杯や器台等の形態から廻間遺跡(赤塚次郎1990)での5-8期、すなわち廻間II-III式期に中耕I-IVの時期的な併行関係を考えておく。

註

- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
柿沼幹夫 1982 「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古5』土曜考古学研究会
金井塚良一 1971 『台地研究No.16』同研究会
黒坂禎二 1989 『上組II』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
小久保徹 1976 『日本住宅公団(川越・鶴ヶ島地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』埼玉県教育委員会
埼玉県史編さん室 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』
埼玉県教育委員会 1991 『古墳詳細分布調査概報1』
関川尚功 1976 『纏向』桜井市教育委員会
坂戸市 1992 『坂戸市史古代史料編』
谷井彪ほか 1974 『南大塚・中組・上組・花影』埼玉県教育委員会
西口正純 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
坂野和信 1978 『下道添遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
美里町 1986 『美里町史』
水村孝之 1980 『根平』埼玉県教育委員会
村田健二 1990 『広面遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

2. 古墳時代の集落と方形周溝墓群の変遷

(1) 集落の変遷

古墳時代の住居跡群は調査区中央やや北東寄りに集中する傾向がみられる。しかしながら、S J 51-53やS J 62-64のように重複関係にあるものは少数であり、新旧関係が把握できたにせよ、土器の明確な型式差はとらえることができない状況である。

土器の編年試案図では主に台付甕の口縁部の形状に注目して型式的な流れから新旧2相の時期区分を行ったが、S J 22・26・35・36・46・49・51・63・64・66・67・73・74・75・76・78・81・84・87を古相(I期)、S J 17・18・19・20・21・24・29・30・32・33・34・37・39・40・41・42・43・47・52・53・56・61・65・62・77・80を新相(II期)として提示しておいた。

例えば、S J 39・40は両者ともII期としたがその近接した状況から同時に存在したとは考えがたい。S J 51-52も浅い覆土の重複関係の確認に誤りがなければ、集落廃絶時に立っていたのはS J 53である。

また、S J 61-66の関係についてもS J 65が築造された時点でS J 66が廃絶されていたことが明らかである。S J 61・65の新旧関係は直接は不明だが、S J 61とS J 62-64とが近接する状況から

は同時並存の可能性は薄い。S J 62-64の重複では当初S J 63・64（新旧は不明だが改築の可能性が高い）が建てられた後、S J 62が改築され集落廃絶の時期を迎えたのだろう。そうした場合S J 61と65との新旧はS J 61→S J 65の順が考えられ、集落最後まで立っていたのがS J 62・65という結論になる。

こうした、重複または極めて近接した状況の住居跡は集落廃絶時既に消滅していたと考えられるが、I期とした住居跡の中には土器形態の近接性から集落廃絶時まで存在していた可能性を否定し得ない。

(2) 方形周溝墓の変遷

方形周溝墓の群構成は既に各遺構の説明の中で述べたが、あらためて整理すると、I群（S R 1-4）、II群（S R 5-14）、III群（S R 16-22・S R 31-42）、IV群（S R 15・S R 23-30・S R 37-41・S R 43-49）、V群（S R 50-56）、VI群（57-62）、VII群（S R 63-68）、VIII群（S R 15）の8群と考えた。各周溝墓間の空間と軸線の方向性の近似性を考えての結論である。さらに土器の新旧相を考慮し、各群の周溝墓群の形成過程を推定してみよう。（第173図）

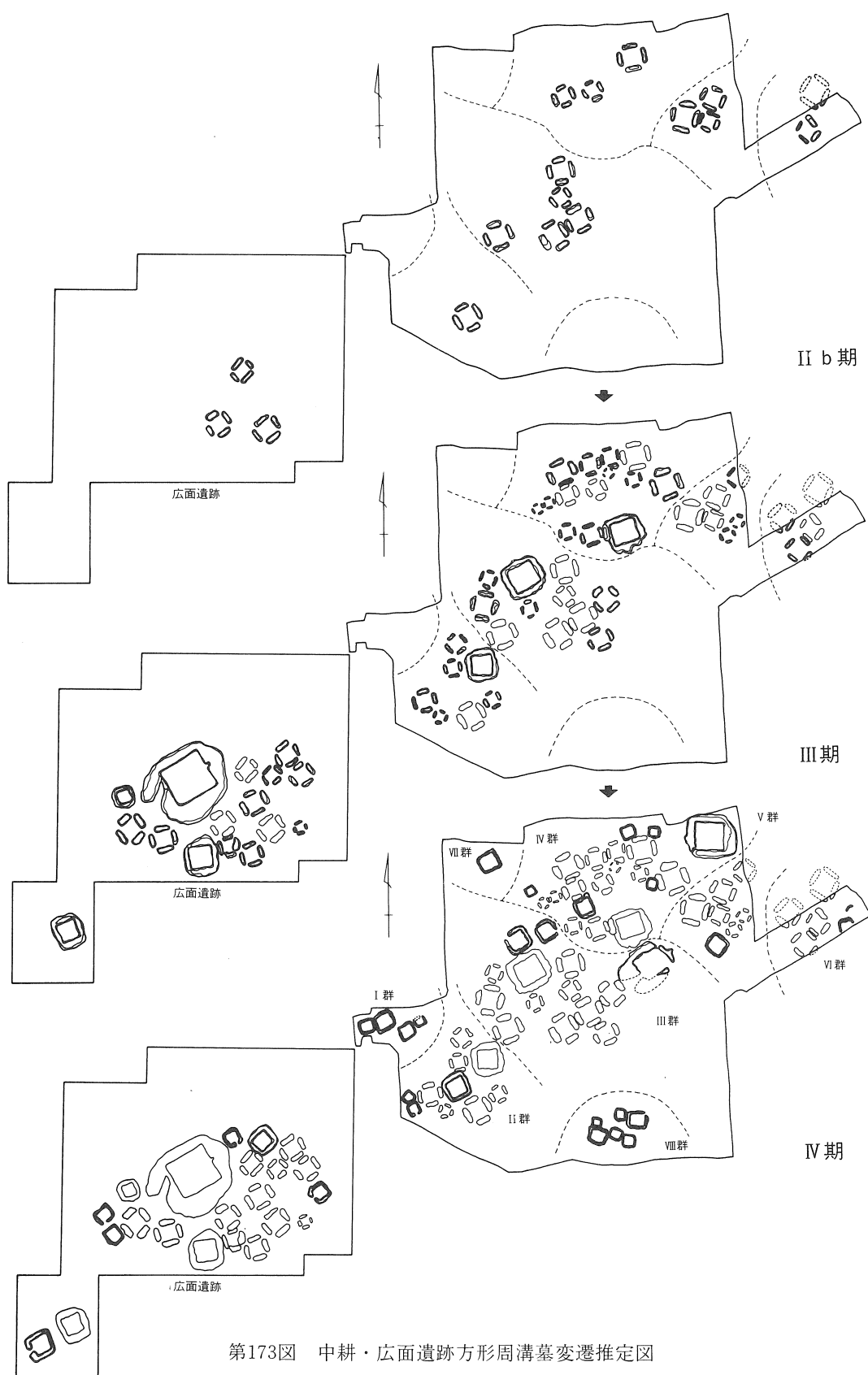
I群ではS R 2→S R 1への順序が土層断面から確実である。S R 2・3は重複しないが、ほかの群、例えばIII・IV群ではその出現の契機となる所謂起点墓が近接して出現した後、これが核となって周辺に築造が継続される状況からすると、S R 2・3がまず築造された後S R 1・4が築造されたものと考えられる。そして純粋に全周形の形態のみの構成からIII期以前に遡る可能性は薄いものと考えられ、墓域の完成期であるIV期として考えた。

II群は、III群の起点墓であるS R 34等との軸線の近似性から、12を起点墓として考え、墓域形成期のII a期と考えた。展開期であるIII期にはS R 7・8・9・10・14やS R 13が構築され、四隅切れから全周形への形態的な変化が生じたものと考えられる。完成期のIV期は既にS R 7・10の周溝外方部が埋没し始めたのだろう、重複するか極めて近接した状況でS R 11が築かれ、さらに周辺にS R 5・6が出現したものと考えられる。

III群ではS R 34を、その周囲の周溝墓の周溝が避ける様子から、最古と推定できる。S R 31も土器の古相からS R 34とほぼ同時期と推定した。次にS R 18や32・33を同じII a期中に考えた。III期では16・17・21・22・35・36が出現し四隅切れ→全周形への転換が行われ、IV期は一隅切れのS R 19・20、前方後方形と推定したS R 42を考えた。

IV群では土器が僅少だが周囲の四隅切れ形周溝墓との周溝の配置関係からS R 29・45を、S R 39は土器の古相からのII a期と考えた。III期はS R 29・39・45に近接して構築される四隅切れ形の全てと全周形のS R 41を充てる。IV期はIII期までの空隙または周囲に出現した全周形周溝墓を考えた。IV期としたS R 28は土器に古相なもの（1）を含むが、破損面が古く周溝墓の直接の時期を示すとは思われない。

V群は遊水池になお数基の周溝墓の存在を推定できる。土器の古相からS R 53が起点墓である。これに続くS R 52・53もII a期に考えた。周囲の四隅切れ周溝墓、S R 51・55・56をIII期、外周に配置された全周形のS R 54をIV期に充てた。



第173図 中耕・広面遺跡方形周溝墓変遷推定図

Ⅵ群はⅤ群同様遊水池におおむね数基の周溝墓の存在を推定できる。四隅切れと推定される周溝の一部の検出にとどまったが、土器の古相からS R 58が起点墓である。S R 59は土器相からこれに続くものと思われ、これもⅡa期に考えた。Ⅲ期には周囲の四隅切れ周溝墓、S R 57・60を、全周形のS R 61・62はⅣ期に考えた。

Ⅶ群はⅠ・Ⅷ群と同様独立して営まれ、全周形、一隅切れ形の周溝墓の構成である。遺物が少なく土器の面での時期の判断が困難だが、ほかの群での小形の全周形周溝墓が群中で主体的な位置を占めることがなく、周辺の選地をして後出的なあり方をしているので、本群は全てⅣ期と考えておく。

Ⅷ群はS R 15単独で存在する。Ⅰ・Ⅶ群のように全周形の周溝墓のみで構成される群の起点と墓と思われ、発展がないまま墓域の廃絶を迎えたものと思われる。主軸偏差はS R 19・20・23と近似しこれらの群との関連を想定できる。遺物がないが形態と配置状況からⅣ期であろう。

なお、紙面に余裕がないのでいちいちその根拠を示すことができないが、既に報告済みの広面遺跡の方形周溝墓群の形成過程についても本遺跡の各時期に照らして私見を併せて図示しておく。

3. 方形周溝墓出土木製品について（S R 41出土の二又鋤に関連して）

(1) はじめに

本遺跡の周溝墓群中S R 41からは一木二又鋤が、S R 13からは棒状木製品が出土している。

周溝墓から木製品が出土したのは、関東地方では初例である。本格的な検討のためには類例を待って、それらと比較しなければならないが、その前段階として本遺跡の木製品に限った詳細なデータの提示と、主として西日本を中心とする他遺跡との比較を行うことによって今後の研究の指針を得る必要がある。本項では、この両点に絞り、検討を行うことにしたい。

(2) 中耕遺跡出土の木製品

本遺跡出土の木製品は、S R 41の二又鋤、S R 13の棒状木製品の2点である。

S R 41の一木二又鋤は、溝底から、地山の黄灰色シルト直上から出土している。軸方向は周溝と直交する方向である。遺存状態は良く、身の一部を欠くがほぼ完形で出土している。全長102cm、身幅22cm、柄長50cmの一木造り式の鋤であるが、身中央を先端から切込み二又としている。握りから身まで丁寧に加工されており、握り及び柄の部分には使用時のものと思われる痕跡が残る。握り部の痕跡は、握った時に力の最も加わる部分に明瞭な摩滅が窪みとなって残っている。柄の部分では、身から近い位置にすり減ったような跡が連続してみられる。これらの痕跡は当時の使用痕と考えられ、現在のスコップの使用法と同じように使用されたことが分かる。また、使用材はアカガシ亜属で、耕起具では一般的に選定使用される樹種である。

これらのことから、本例は鋤本来の目的で作成され、使用されたことが分かる。ただ、このような一木造り式の二又鋤というタイプは類例が少なく、弥生―古墳時代で、管見に触れる限りでは、奈良県桜井市城島遺跡・外山下田地区（清水進一1991）の6点、埼玉県行田市小敷田遺跡（吉田稔